



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4528号 2018.8.5 発行

空の旅、発達障害の子らを支援 航空大手、相談窓口や冊子 京都新聞 2018年8月4日



航空各社が作成した発達障害がある利用者向けの冊子

多動や感覚過敏などで飛行機の利用をためらう発達障害の子どもや家族に向けて、航空大手や空港が冊子を配布するなど支援の充実を図っている。不安な点は利用前に電話窓口で相談することが可能で、移動の増えるお盆期間を前に「ぜひ空の旅に挑戦してほしい」と呼び掛けている。

各社には、飛行機の搭乗は難しいと悩む当事者家族から「帰省は諦め

ている」との声や相談が寄せられていた。

電話相談窓口は、全日空が(0120)029377、日航が(0120)747707。両社とも年中無休、午前9時から午後5時まで。

世界選手権で躍進誓う 知的障害サッカーに4人

読売新聞 2018年08月04日



日本代表として世界選手権大会に出場する(左から)西監督、原良田選手、谷口選手、泉谷コーチ

知的障害者サッカーの世界選手権が5日、スウェーデンで開幕する。監督として日本代表を率いるのは、始良市職員の西真一さん(45)。県出身の選手2人とコーチも代表として戦う。ワールドカップ(W杯)ロシア大会では南さつま市出身のFW大迫勇也選手の活躍などで日本が躍進した。選手らは「次は自分たちの番」と意気込んでいる。

「私たち監督とコーチが一緒になり、選手の後押しをしていきたい」。7月に鹿児島市で開かれた壮行会で、西監督は力強く決意表明した。いずれも同市在住のDF谷口拓也選手(23)、MF原良田龍彦選手(18)、出水市の特別支援学校教諭、泉谷光紀コーチ(35)も紹介され、約100人の出席者から激励を受けた。

代表選手は全国7200人のプレーヤーから選ばれた。前回のブラジル大会にも出場した谷口選手は「ブラジルでの経験を生かし、スウェーデンでも活躍したい」と語り、初出場の原良田選手は「ボールにどンドン食らいつき、ゴールを決められるように頑張りたい」と活躍を誓った。

西監督はブラジル大会ではコーチとして参加し、チームのベスト4入りに貢献した。今大会の目標は決勝進出。西監督は「障害の有無にかかわらず、頑張っている姿は誰にでも感動を与える。(選手たちには) サッカーを通じ、社会で生きていくことに自信を持ってほしい」と話した。

世界選手権は「もうひとつのW杯」とも呼ばれ、1994年にオランダで初めて開催された。W杯と同様、4年に1度開かれ、日本は2002年から5大会連続で出場している。

今大会にはアジアやヨーロッパ、アフリカなどから9か国が出場。日本は6日のグループリーグ初戦で、ポーランドと対戦する。

知的障害者サッカー 「もうひとつのW杯」17人臨む 毎日新聞 2018年8月4日

サッカーワールドカップ(W杯)と同じ年に開かれ「もうひとつのW杯」と呼ばれる国際知的障害者スポーツ連盟主催の「第7回INAS-FIDサッカー世界選手権」が5日にスウェーデンで開幕する。全国約7200人から選抜された日本代表は17人。前回2014年のブラジル大会で過去最高のベスト4入りを果たしており、目標は決勝進出だ。

【林壮一郎】

選手権は1994年にオランダで初開催され、日本は自国開催だった第3回大会(02年)で初出場した。今回5大会連続出場となる。17人の代表選手は昨年7月以降の合宿や海外遠征での評価を基に選ばれた。

2度目の代表選出となった鹿児島市のDF谷口拓也選手(23)=大分県出身=は、前回大会で5試合中4試合にチームの中心選手として出場し、ベスト4に貢献した。

母秀代さん(56)は「息子は監督の指示がうまく理解できず、ずっと悩んでいた」と振り返る。ピッチを3分割し、各エリアでどんな動きをすればいいかをコーチや監督に繰り返し質問して戦術を頭にたたき込む努力を重ねた。再び夢舞台に臨む谷口選手は「悔いのないサッカーをしたい」と闘志を燃やす。

鹿児島県伊佐市出身の原良田龍彦選手(18)は今回、初めて代表に選ばれた。小学4年でサッカーを始め、鹿児島高等特別支援学校1年生の時には社会人に交じって九州代表選手となった。卒業後は特別養護老人ホームで清掃の仕事しながら県選抜チームに所属。チームの公式練習は週1回だが毎日、仕事後の自主練習を欠かさない。「大会は中学生の頃からの目標だった。努力すれば、夢の舞台に立てるということを、障害のある人たちに伝えたい」

日本代表の西真一監督(45)も鹿児島県出身で同県始良市職員。前回大会はコーチを務めた。「できるだけ単純な言葉で順を追って伝え、戦術については同じ映像を繰り返し見て覚えてもらう」と熱心な指導で選手たちを支える。「知的障害者サッカーも健常者とルールは同じ。競技自体の見た目にも違いはない。地道な努力を重ね、試合ではひたむきにボールを追う姿を見てほしい」とW杯同様の応援を訴える。

日本代表には山口県からDF吉永裕也選手(22)とFW平野貴士選手(29)も加わる。大会には9カ国が参加し、日本の1次リーグ初戦は6日のポーランド戦。8日にサウジアラビア戦、10日にロシア戦があり、上位2チームが決勝トーナメントに進出する。

「農福連携」で原木シイタケ 唐津市の農家と就労支援B型事業所

佐賀新聞 2018年8月4日

2020年東京五輪の開幕まで丸2年となった。五輪選手村の食堂や競技会場で提供できる食材は、国際標準となる農業生産工程管理「GAP(ギャップ)」認証を取得した農場の作物に限られる中、唐津市内の農家と障害者施設が連携し、食材として原木シイタケの提供を目指している。すでに日本版の「JGAP」認証を取得しており、世界的なビッグイベントに関わりたいと意気込む。

原木シイタケ栽培のため、伐倒作業に取り組む障害者の男性＝唐津市相知町



原木シイタケ栽培でJGAPを取得した中山茂廣さん(左)とカーマンの指導スタッフ。東京五輪での食材提供を目指している＝唐津市相知町



連携してい

るのは、唐津市相知町で約半世紀にわたって原木シイタケ栽培をする農家の中山茂廣さん(69)と、同市厳木町の就労継続支援B型作業所「カーマン」(河野博施設長)。7年ほど前、カーマンと関係する障害者を中山さんが雇用したことが縁で両者の関係が始まり、現在は伐倒や植菌、収穫など重労働が伴う原木シイタケ栽培の大半を委託している。

作業を段取りする中山さんは「常時2人くらい派遣してもらっているが、作業のレベルが高く、収穫は完全にお任せの状態」と信頼を寄せる。河野施設長は「コンセプトは健常者のための障害者施設。健常者レベルに付いていけるような訓練をして、良品をつくることできないと雇用は継続できない」と強調、現場にスタッフを派遣して作業を常に見守る。昨年6月には原木シイタケとして初のJGAP認証を取得するまでに連携は深まった。

認証を生かすために目を付けたのが東京五輪。世界的にも和食が注目される中、原木シイタケがだしなどで使えるのではと考えている。最大の課題は安定供給。中山さんの生産量は年間約2トンと県内ではトップだが、選手村での食事は膨大な量になることが予想され、必要な量も分からないのが現状だ。

五輪食材への道のりはまだ手探りの段階だが、河野施設長は「まずは手を挙げ、自分たちの取り組みを知ってもらうことが大切」。中山さんは「菌床栽培が主流になる中、原木の良さを知ってほしい。仲間をつくってぜひ五輪の食材として納め、良さを再認識してもらいたい」と話す。

県立高に看護師配置 難病15歳の学校生活全介助

中日新聞 2018年8月4日

男性教諭や看護師の女性と教室に向かう村上紗楓さん(手前)＝金沢市の金沢二水高で(小室亜希子撮影)

教委派遣 北陸初、二水高で

全身の筋力が低下する国指定難病「脊髄性筋萎縮症(2型)」で、身の回りの介助と人工呼吸器が要る金沢市の村上紗楓(さやか)さん(15)。石川県立金沢二水高校に今春入学し、県教委が派遣した看護師のサポートを受けている。看護師配置は障害者差別解消法で義務づけられた「合理的配慮」の一環で、法整備が進学を後押しした格好。県立高校への看護師配置は北陸三県で初めてで、全国でも先進的な取り組みだ。(小室亜希子)

金沢二水高は県内有数の進学校。村上さんは授業や休み時間など学校での一日を、ほぼベッドに寝た状態で過ごす。授業中は書見台に教科書を立て、板書が速い場合はタブレット端末で撮影してノート代わりにする。グループ討論にはベッドの向きを変えて参加。所属する写真部ではスマートフォンで撮影を楽しむ。

看護師が登校から下校まで付き添い、学校生活を支える。体力を保つために二～三時間装着する人工呼吸器の管理、手押しバギーによる校内の移動、着替えの介助。教科書をめくり、消しゴムで消すといった支援も。村上さんは「勉強は大変。だけど友達とのお弁当



やおしゃべりの時間が楽しい」とほほ笑む。

一歳で病気が分かり、医師から「起立、歩行は生涯、不可能」と言われた。母の悦子さん（47）は落ち込んだが、理屈抜きにかわいい笑顔に励まされ「顔を上げて生きていこう」と決意。幼稚園は健常児と一緒に過ごした。地域の小学校への就学を希望したが、市教委から「特別支援学校が適当」と通知された。悦子さんら家族は「みんなの中で一緒に過ごしてほしい」という思いを伝え、地域の小学校への入学がなかった。

通常学級で過ごした六年間、授業中は張り切って手を挙げ、休み時間は電動車いすで遊んだ。一泊合宿にも参加した。マラソン大会では男子が代わる代わる電動車いすを押し、ゴールを応援してくれた。成長するにつれ、座った姿勢を保つのが難しくなり、徐々にベッドで授業を受けることが増えたが、中学校も通常学級で過ごした。

高校進学は自然の流れだったが、受験や入学後の体制は不安だった。結果的にほぼ要望が認められ「みんなと同じスタートラインに立てた。ありがたいと思う」と村上さん。「たくさんのお会いがあったから、今の自分がある。これからもいろんな人と関わっていきたい」と話し、県外の大学に進学を目指している。

法で義務づけの合理的配慮 識者「後に続く人に励み」

石川県教委によると、県立高校に看護師を配置したのは、主に「医療的ケア」にあたる人工呼吸器の管理に対応するため。特別支援学校に配置した看護師を月一金曜に交代で一人ずつ派遣している。

二〇一六年四月施行の障害者差別解消法は公的機関に対し、個人の特性に応じて必要な「合理的配慮」を行うよう義務づけた。村上さんの場合、入試でも看護師配置やベッドの持ち込みが認められた。

医療技術の進歩で医療的ケアが必要な子どもは増え、小中学校で看護師を配置して受け入れ態勢を整える動きは全国的に広がりつつある。一方、本紙の調べでは、中部九県で県立高校に配置実績があるのは石川県の他は滋賀県のみだ。

先駆的に取り組む大阪府では本年度、全介助を含む四人が看護師配置を受けて府立高校に通う。今後、普通高校への進学を目指す生徒は増えるとみられる。

村上さんのケースについて、金沢大の河合隆平准教授（障害児教育学）は「高校では実績が少なく、全国的にも貴重な成果だ。後に続く人に励みになる」と評価している。

高知県宿毛市に作業所カフェ 利用者ら接客に奮闘

高知新聞 2018年8月4日



作業所の利用者らが働く「ひかり de のんびり Cafe」
(高知県宿毛市長田町)

障害者の就労を支援している高知県宿毛市小筑紫町福良の「ひかり共同作業所」がこのほど、同市長田町に「ひかり de のんびり Cafe」をオープンさせた。

働く場所とともに地域住民との交流の場を提供しようと、作業所が所有する建物の1階を利用して7月9日に開業した。モーニングとランチを中心に、職員2人と利用者5人で切り盛りしている。

首に「うそつき」障害者虐待 原告の姉「謝罪して」

神戸新聞 2018年8月3日

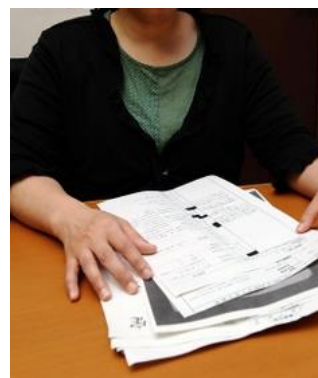
重度の知的障害がある20代女性が3日、心理的虐待を受けたなどとして兵庫県姫路市西庄乙の共同生活援助事業所「ぐるーぷほーむ みのもる」＝廃所＝の運営会社の女性社長（53）を神戸地裁姫路支部に提訴した。訴状によると「私はうそつきです」といった内

容のプラカードを首から下げるよう強いられたという。女性を支える姉（46）は「なぜ妹が嫌がるようなことをしたのか、真実が知りたい」と話した。知的障害のある妹が心理的虐待を受け、情報公開請求などで提訴に向けた資料を集めた姉＝神戸新聞姫路支社

知的障害者の女性は姫路市生まれ。中学卒業後、身の回りの世話をしていた父親は肺がんで死亡。母親も認知症が進み、姉が面倒を見てきた。通っていた施設の運営会社が同事業所を立ち上げることを知り、「信頼するスタッフと暮らせたら」と入所を決めた。

姉が情報公開請求で得た施設の業務日誌には「首からかけるカードが気になって、そのことばかり言い続けて困りました」「聞き流しで構いません」といった記述があった。女性は長時間立たされるなどして腰痛や不眠を訴え、約1カ月の入院後、施設を移った。

市の監査で被害が発覚したが、施設側から説明はない。姉は「信頼していたのに裏切られた思い。謝罪してほしい」と話した。（伊藤大介）



【西日本豪雨】医療機関の連携不足を克服 熊本地震の経験生かせ 倉敷・真備

産経新聞 2018年8月3日

倉敷市では医療、保健分野の連携が図られている



西日本豪雨で被災した岡山県倉敷市で、地元の医療・福祉関係者が情報を収集・整理し、被災者の治療や公衆衛生の向上に着実につなげる組織「倉敷地域災害保健復興連絡会議」（Kurashiki DRO）（クラドロ）を設置。現場が混乱し、情報伝達ミスや各機関の連携不足が生じがちな被災地で効果を上げた。平成28年の熊本地震での例を参考にした取り組みで、現在は岡山県南西部災害保健医療活動調整本部がその役割を継承。地元医療関係者は「医療機関同士の連携がスムーズに取れている」と手応えを感じている。（地主明世）

「避難者は便秘や腰痛を訴える方が多くなっているので注意してほしい」

7月末の朝。岡山県備中保健所（倉敷市羽島）横のプレハブで開かれた定例の調整本部会議で、集まった医師や保健師らが被災者の体調や避難所の課題などを報告し合った。参加したNPO法人「災害人道医療支援会」のメンバー、甲斐聡一郎医師は「行政に避難所などのニーズを素早く伝えられる点でも役立つ」と話す。

調整本部は、連絡調整を行う「総括班」や医薬品の確保などを担う「衛生班」といったチームを設置。避難所で被災者を診察した医師からの情報でスムーズに医薬品を処方したり、避難所の要望に応じてクーラーを設置するなどした。医療機関と避難所をつなぐ臨時バスの運行管理も行っている。

調整本部の前身、クラドロは「倉敷市」の「クラ」と「災害復興会議」の英字表記の頭文字から取った。立ち上げは7月9日。倉敷市に派遣された国立病院機構災害医療センター（東京）の「災害派遣医療チーム」（DMAT）の隊員が、熊本地震での経験をもとに設置を提案した。

熊本県などによると、一昨年熊本地震で、被害の大きかった同県阿蘇市内では保健所も被災、職員は住民らの対応に追われた。「どこでどんなことが行われているのかわからな

いまま、目の前の対応で精いっぱいだった」(熊本県阿蘇保健所の担当者)という。

そこで、現地で阿蘇地区災害保健医療復興連絡会議(ADRO)(アドロ)を設置。保健所と協力し、医療機関が集まる情報共有の場を設けたことで、避難所でノロウイルスの患者が出たときも、早期対応で感染拡大を防ぐことができたという。

倉敷市のクラドロでは当初、DMATと地元保健所が中心に情報を集約。日本医師会の災害医療チーム(JMAT)やリハビリ関連団体でつくる支援組織「JRAT」、国際医療ボランティア団体「AMDA」などが続々と到着する中、被災地の実情に沿った支援活動を後押しした。

調整本部はそれを引き継ぎ、現在は、今回の災害で初めて派遣された「災害時健康危機管理支援チーム」(DHEAT=ディーヒート)の協力も得ながら、医療機関の復旧支援や情報収集・共有を行っている。

災害時の医療連携に詳しい日本医師会総合政策研究機構の王子野麻代(おおじのまよ)・主任研究員は「応援に入った医療関係者と地元が一体となったクラドロなどの取り組みは、災害時の連携の新しい形として定着しつつある。外からの応援がなくなったときに急に支援が途切れないよう、被災地の行政や医療関係者が中心となることが重要だ」としている。

障害者と健常者が一緒にプレー満喫 パラバレーボール大会 産経新聞 2018年8月5日

障害者と健常者が一緒に参加する「第21回夏パラバレーボール選手権大会」(主催・日本パラバレーボール協会)が4日、台東区の台東リバーサイドスポーツセンターで始まった。

障害者スポーツ(パラスポーツ)のシッティングバレーボールを通じ、障害者と健常者の交流や相互理解を図ることが目的。チームは障害者のみ、障害者と健常者の混合、健常者のみのいずれの構成でも参加できる。

4日は予選が行われ、男女別で計27チームが熱戦を繰り広げた。大会を協賛する野村ホールディングスのチームも参戦。監督の池田肇・野村証券常務執行役員は「東京パラリンピックまで2年となる中、社内の機運を高めるのに非常に良い機会になる」と参加の意義を語った。

5日は予選を勝ち抜いたチームによる決勝大会、敗戦チームによる交流試合が行われる。

両陛下、知的障害者らが働く農園を視察 北海道

朝日新聞 2018年8月3日



合同会社竹内農園で農作物の袋詰め作業を見る天皇、皇后両陛下=2018年8月3日午後3時28分、北海道北広島市島松、迫和義撮影

車内から手を振る天皇陛下=3日午後、札幌市中央区



天皇陛下は3日、北海道北広島市の竹内農園を訪れた。同園は就農支援で知的障害者らを受け入れており、お二人はピーマンやトマトを袋詰めする作業を視察。天皇陛下は「障害者や高齢者にいい機会がつけられていいですね」と話した。

今回は5日に札幌市で開かれる北海道150年記念式典を目的とした訪問で、来年4月末の退位を控え、最後の北海道訪問となる見通し。4日には初めて利尻島を訪問する。天皇陛下は象徴として島々に生活する人たちを大切に思ってきたが、利尻島は55島目の訪問となる。(島康彦)

社説：経済財政白書 課題と向き合う姿勢は 信濃毎日新聞 2018年8月4日
成果や目標を語るのはいいとしても、直面する問題と謙虚に向き合う姿勢に欠けていないか。

政府が公表した2018年度の年次経済財政報告（経済財政白書）である。

第2次安倍政権が発足した2012年末から5年半に及ぶ景気回復が「戦後最長に迫る」と評価。持続には「潜在成長率」の引き上げが重要とし、企業に生産性の向上を求めた。人手不足や技術革新に対処するよう訴えている。

一方、米トランプ政権が仕掛ける貿易戦争の激化など、日本に深刻な影響が及ぶ世界経済の課題の検証には踏み込まなかった。

社会保障の持続性、財政再建、大規模な金融緩和の副作用など、アベノミクスの負の側面に関する分析も十分とはいえない。

白書は、1956年度の「もはや戦後ではない」など、時代の空気を映す名文句を残してきた。18年度は「今、Society（ソサエティ）5・0の経済へ」との副題を付けている。

狩猟、農耕、工業と進展してきた中で、情報社会に続く新たな社会のことだ。あらゆる機器がインターネットにつながるIoT（モノのインターネット）技術などが浸透した未来像を描く。

人手不足の解消については、人材の質を高める社員教育や柔軟な働き方の推進を求めたほか、AIやロボットの活用を進める文脈でも説明。ITに対応できる人材の育成も鍵を握るとした。

デジタル技術の重要性について異存はない。ただ、それは政府がこれまでに成長戦略で打ち出した内容とも重なる。成長戦略は、毎年更新しながら未達成の項目が多い。まず必要なのは、提言より検証ではないか。

景気回復は、日銀の大規模緩和がもたらす円安に支えられた側面が強い。引っ張ってきたのは海外の好調な経済を背景にした輸出産業と海外投資だ。貿易戦争はハイテクを巡る米中の覇権争いの様相も示している。世界経済の踏み込んだ分析は、今後の日本経済を考える上で欠かせないはずだ。

日銀は先日、大規模緩和の副作用を認め、政策の修正に追い込まれた。金融政策は息切れを見せている。6月の日銀短観では5年半ぶりに目安の指数が2期連続で悪化した。一方、政府は財政健全化目標の達成を先送りしている。

白書は、国民や企業に経済の現状を伝え課題を共有するためにある。リスクを直視せず政権の政策宣伝に終始するようでは、役割を果たすことはできない。

「シンガーソングライターちさと」障害を持つ人や子供たちに笑顔を届けるため、CD製作



に挑戦します！ 秋田魁新報 2018年8月4日

CD製作に挑戦！

みなさんこんにちは！大館市出身19歳、シンガーソングライターちさとです。私は秋田県内を中心イベン



トや障がい者施設、老人ホームなどでギター弾き語りライブをする活動をしています。ライブ活動をする中で、お客さんから「もう一度聴きたい」、「CDを作ってライブがなくても聴けるようになりたい」というお声を頂いています。また私自身ももっとたくさんの人に、まだ私の歌声を聞いたことがない人に聞いてもらいたいと思っています。そんな思いからCD製作をすることにしました！

3曲入りシングルCDを作成します。

10月発売を目指していますので、みさなんの応援、ご支援どうぞよろしくお願い致します！

私には障害があります

私には「高次脳機能障がい」という障がいがあります。



私は小学3年生の時に急性リンパ性

白血病になりました。白血病の治療の影響で脳梗塞を発症してしまい、その影響で高次脳機能障がいという障がいが残ってしまいました。障がいがあるとわかったのは高校2年生の時でした。小学4年生の時に退院してから障がいがあると分かるまでの間は、周りの友達とどこか違ったり、自分の発言を理解してもらえず苦しむ



日々もありました。そんな私を救ってくれたのが音楽でした。

この経験を活かして、音楽を通してたくさんの人に笑顔を届けると同時に病氣と障がいの認知度・理解度を向上させたいと思い、こうして障がいを抱えながらもシンガーソングライターとして活動しています。

障がいがある人や子供たちに笑顔届けたい！

私は障がいで苦しい時に音楽に助けられました。ある動画を見てギターを始めたくなり、ギターを手にしてからはギターの虜になっています。ギターを弾くことや歌うことで苦しみが和らぎました。病気で入院中も音楽を聴いて励まされた気持ちにもなりました。

私のように病氣や障がいなどで苦しんでいる人が全国には大勢いると思います。私の歌声で少しでも多くの方に笑顔届けたい、そんな思いで活動を続けています。それと同時に病氣を経験し、障がいがあるこんな私でもこうして生き生きと活動できることを証明して



夢と勇気をたくさんに届けたいと思っています。

リターンについて

お礼の品は、CD、直筆サイン&お礼のコメント、オフショット写真、CDジャケットへスペシャルサンクスとして名前の掲載（ニックネーム可）をご用意しています。

○5,000円コース

- ・CD 1枚
- ・オフショット写真 1枚
- ・直筆サイン&お礼コメント

・CDジャケットへスペシャルサンクスとして名前の掲載（ニックネーム可） ※ニックネームご希望の方は、「その他連絡事項」にご記入ください。 ※11月ごろのお届け予定です。



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行